



群書類從
日記
陸

775
214



曾4
775
2/4

群書類從卷第三百二十五

檢校保己一集



日記部六

堯孝法中日記

文安三寅年正月一日天氣悠然屬陽春しこれ

例小予かせくみ條の社頭よりうへへ海をうへ

し三首

社頭春

海とれ神あり漁代り舟の春あり歌しこころははるかに

社頭松

し春も海つの上れはる門の暮き向かきひて津波あふん

社頭祝

おき程乃まなご宮ねむひのまにみくはるあし
方陽景耕七社法樂歌

八幡

八幡山よりあそぬまふあひたかそふ神の恵とせし
玉津島

小波

及しゆらよふあそぬあひたかそふ神の恵とせし
住吉

祇園

櫛もれ神のをねふとそふまに神をいそれなす
編前

日吉

編前山ありそふ松のあそり霧にふひくま風をゆく
日吉
神の恵れ日吉くまふとかそふもまのそふやそそまかきひん
及源文海神演所吊 講師春森若法宗以後
及今集校次第春部上於神を演くおひ及教訓終
初ふ一睡

義乃國公素仕わ本領四名還補仍一昨日許
下知也絶り等并領る時細川右馬助入道家魚

わくわくする意のせいのめまゝ新編とてまはるる風
素人事

羨めしとあふへへいまのよのねよけいそる事なま
秋人事

月紙りて病をがめしゆふくはつれ光の秋ありけり
冬雜也

あきうりまはらうさいの路とあふわりの浦まはるの友な
鳥地儀

あつこういさみの光りひまてまのつらる世儀をり
と度還補共業は福をいし復返し仍為遺興如
此海に但波り午中網言の古ありいさる世儀のい

初と山也同名より計にありひをゆるやうを混
礼事也

人教正徹祿昨 下総入道宗欣 沙汰常熟

正見 知蓮 荻原氏世此介一様字や 鶴丸

十日又まうくゆりに時あり入て舎をそむかり
しは夕月秋と具ゆきとゆりす香ありて去の
空しくえんにおほくたれは六条友ため外六条天
祇園場堂三条八幡文部と巡行

きかへる夕の月れ御新もよすきねきき表のむり
十一日七日春々白にみりゆるとす年娘のうき
そくまうて

いふ書も程あきうかよてうさめん子代の境と神ありし
十二日讀經終居如常

十三日此高申月次之旨令始よ

新如去

ゆゑ分る表のふりあひ入と宮ふあきとてまをん

松残雪

程少の書えへあひふし程のひささめしる書は松え

春津祝

ちまふなまつて神と程えまそふと成をわらぬ

當座の十首よ

胡霞

あまの戸とゆり光ハあまそる日たをれは成ま成

稀衣

誰みかおとふ路るも成まうふとふとつと心ありん

浦鶴

和齊此浦にあまのむれわら友鶴のぬく境とああゆ未

人教出歌巾濟昨同溝昨實社 中智を捕

春法卷丸 氏部が獨頭經 法橋長全

法橋經長 固雅 敬法寫教 沙彌常熟

沙弥元康 友尔重隆 深貞信 友尔正信

沙弥智彦 友尔仲俊 富道祝忠

宗順 念河山と廿二人

十四日讀經祿名如常自室池院法中四城法樂
二十首歎以而望則後進う長金法橋二十首題
而望同深第う自さく和哥活刺車申

十六日幼仍如毎日其他事心静吟和歌唱祿名
十六日朔天齋室所歎以いのりれ義律大方友回
卷教進入吹頭人こ来て六十首并さくゆ一冊

當公答

多れも分出津ふよの春さそや答にわうぬ答れあふ
適易花

みうれなたるこの奥も程あき心のか分のなとるけさ
名不熟

切り田のつらうとひとさあつらなふ人そあうそ

題市 讀師回 清師去私卷云

人教君誅 春法卷云 素琳を平知安あ田

元康内友 固雅 紀元威あ田 源久圓解由

常純夫野 友京元康内友 紀元家安田 常安道

堅有在岡 三善元秀高安 友京元賢 源元仲入道

橋元家夫野 奥河崎と十八人

十七日勤行如常每春之例水子かせく七下る
四百度法とありと

十八日之善为教もこはく月次舎始

都早春

雲さくぬ山も波くさむらひの影にまをさす

梅薫風

白ひく風さくまー梅花さるるあふれをそへ津海

奇世夜

いづのこゝれみちとく海にまをさすあふれのこゝ

當夜十五首に

寫春春

のちのちあるはと昔は津のこゝはなれり

と早蕨

誰けさふもひあふ春もまをさすあふれのあふ

契恋

かろちよなめりまをさす入連のこゝはなれり

欲承恋

いよえんうはれりあふれあふれ山風さのこゝはなれり

海村烟

そよ風や浦も民もまをさすやににふをさすあふれ

題中 漢師回 講師 貞基

人数 貞源 永祥 飯尾肥 時繁 友系 園雅

貞基 布能 照基 安友 深持子 富永竹 為教

常熟 貞秀 以下 教

十九日中就上人素く観經講演信心修行終誓

行せ代事 男山へ進代友

廿日富山御理書入及 賢良家とて月次舎始

初春松

今日一花子日よかきを暮人むく心成し子の松のよあこ

對志

を成りたりし心成しよきそおき思ふ志の陰半より此夢

寄

夕夜くよきさうはゆか松のよか松寄ゆふ秋風をぬく

椿夜

林をめぐり流葉をすきの林衣夕日かこれの夜半のあり

谷不実

ゆきの山実れ坂登の板むきく冬一さなもあつるよよ

藤

ゆるゆるふりりの花よか松急まつくぬゆめれぬき

出題花寄井中納言入及 淡所同講所宗初

人教花寄井 言々一文左宗書入 市 正徹

春日之佳入及 富山次郎 固雅 賢盛

常親 心惠 正寛 忠誓 常佐 智彦

宗初以下数家

愚渾中寄哥及披澤系題一首を俄可流

し方歌志密くしちりり寄地寄う清所宗初初

春に松ヲヨメル初哥と讀し心中断腸賢盛津

楽歌と梅くしうふと流也保る所也

廿一日兵庫物貞親りて月次を始す

初春見物

春之れ花さく文政まの鶴のふ代りそくも春は松うえ
尚ほ二十首也

辰春秋

しをそくも春は松うえ

以今初度以後

初久恋

ほそあつても春は松うえ

春不松

今日よりそくも春は松うえ
兼日歎此人多度歎也
以今自今かみり

如公信約とや

廿二日一色友京方丈教初家と月次合始

行遊年友

おのれをよもあひくふ代りそくも春は松うえ
尚ほ二十首也

野雲蓑

夕日しをよもあひくふ代りそくも春は松うえ

春不松

おのれをよもあひくふ代りそくも春は松うえ
春不松

わつらぬしむもあひくふ代りそくも春は松うえ

返

丁のふれ能ともうつのはらふにふれ心のもろく
十七日去庫物貞親りくもく月次の二首に

夕春雨

わひれ春の霧れまにふれさる春雨返一初のみみり
名不記

いそふ山はわつらむれ然せばい中に落るる雪もじり
初のみ意

うわりのけのれれはむらうらむらうらむらうらむら
當座二十首に

春秋

心ありてむ然にたよむむむむの月おつらむらむらむら

春秋

らむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

春秋

あふ人もあふられぬむらむらむらむらむらむらむら

春秋

むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

題名市 漢作 同 漢作 祝忠人 叔如先月

十八日之善為教りくもく月次の二首に

河柳

春柳のちのけけむらむらむらむらむらむらむらむら

うらみのいもをよこふんせいの暮れうらむ
雲浮燈水

そよあに燈るふの末れあふのうらむ
水に芦

きしきくうらむうらむの若れあふ
歌を市湊仲田湊仲壽河人教かき
る清水社くも細うらむを細川湊
ゆくあ十首人

梅菜油

ゆきじりの津の青波かきあふ
あつち

あつち初春うらむゆれうらむ
早秋病

秋のくもわらわあふあふあふ
浦子鳥

和舟浦にそようらむあふあふ
初身衣

あふあふあふあふあふあふ
二月八日細川右る物入る道賢家
あふあふあふ

浦去月

あふあふあふあふあふあふ

山室歌選

あつちの神あつちの物あつちのけつらつらつらあつちの集
浅始末

いづかといふもいづか初めといふもいづか福やのいづか
當座二十首に假名歌

今日の子目れ

今更さふ依のよりいづか初めいづか子目れ世のいづか
梅のぬわひよ

やとれ月梅のぬわひよかたをとも又えさふ世のいづか
春はらきこい

依のつゝいづか日教いづかわいづかいづかいづかいづか

題名市 漢作 同 漢作 元秀 入教 如先

今日在日とる福考 典麻養子 管領才 けり物とあり

そいづとよりいづかいづかいづかいづかいづか

いづかいづか子目のあつちとあつちとあつちとあつちと

と題はさくらて

夜ふた

梅をゆりいづかいづかいづかいづかいづかいづか

十二日祭花園よまうとて法りの法印室はるる

非做りしのをと只独眺らして

あつちいづかいづかいづかいづかいづかいづか

十首黒谷のいづかいづかいづかいづかいづか

まつらみちく宝地流法中門下人しくむ
もくもにむひゆり時

夕日欽うらひひりふきりたるふひきり
十八日三善万敷もくもく月次之首に

遠舟を

さうれもあされ山初ふかおれぬ死のちきり春れ人か

花下女

おれなうあうぬ一本の花の流衣しくよの契なるらん

臨宿

なうりともぬさともさうぬ睡るねやうも回一花の下梅
橋元者茶作ち印布お集つすめゆて宗徳流若

法樂百首目

子日

子の目せし春もよまれぬ松山の津やじういんむくら森

高橋

よ成へともおののちまをたれむひ沙れる法にむらき

七夕

あすの河よりくら浪りあわしむを流しやんくなくれ

落葉

病者のきりぬ海も夕らきのあつる木のこいひをむらう

松名

ふらふらやたきのとせし大なるうらあつる松をたすれよ

初志

おとしひれなるあいらしき春のあけぬらうのこころ

祝言

ふきしるをれきたるこゝろをりてやすきやの国さる

公題中

右政大臣の月次續百首に

二月二日

今日そや流れも清くあらんかたのそらんをれきたる

五林

秋のけさあつこの市へついで病もつらやん秋のそら

植火

いづれに花のつらきあついで春のそら

山

ななきふ風のそらもまうれやれは櫻のそらぬら

親王

そのそられきたる所のそらけやあついで春のそら

廿八日一巻左京大夫秋家より月次二首

水色躑躅

浪よそらけのそらけ候つじあついで春のそら

山家暮春

この浪のつらけらん山すすじ山入るよ春をきついで

清和何方

沈元筆とわらわし

同日智菴歌あ一狂部忘ゆりしりて

松風よにわひし志のいりくく白歌よふ川若れありあり

返

いりそありあうくくあわくくいあわとやそん若れ後浪

四月一日勸り如毎如

二日石清水よもうてく六首歌讀てまうし時

春朔

白雲のふかに物わり羽わしけおさふりや春の八雲山

夏夕

月とそくおちわらわの夕たれは勢もまきらの山わらうくさく

秋夜

まきやふせの浪みまうて月さつふらふられをまう

冬曉

まきほりゆりしひの里からう寂とまのまうたふお

恋心

かきりおく雲あくぬれままやせんまあゆふつうに

神祇

石清水あわく心のまわし相もくくそ神もまて度寐

あやし時紀元盛春飛くく女首うら法樂やまへ

ア

首夏終

賀茂祭

いりまをさつこの宮のまへにまゝあはれおぼえしよ
落暮時ぞ

ねらふおぼえしよてくれけいねあけけいね
ある哀

あはれにまひらねにうらや月かゝるのこひ
高たふ中首よ

郭公頻

此のありりれ常のどりこ絶えたるね日あはれ
春の精川

かろと大のいさふ活あれり秋河よわくさ活の心平

迷情非一

このこも心のいひもほいふからなうけ
河河去月とこりゆと回く法りて

雲雀

あさやうらら雲雀の心こりわらさはいつてよあそん

暎日

あたまじふのふかほりたのけさまれひそき

懐齋

やうはれあひひさてよあそんよあそりあ
廿一日島山ちらみ入た伝室あそん二十首歌演文

女日留山僧理更 吳公夢と月次二首に

卯酉と云ふ

花と月とわかれの思はれは 水と月とわかれの思はれは

對月詩節云

時をわかれぬとて 小泉源と月流あるを 明君と云

来不留哀

うつろあゝつとまの押れは 枕一秋の愛もむじむしとて

當夜六十首に

子規何ゆ

やと泣くやと泣く 雲はねるやと 一村むすまふやと

春思生哀

やと泣くやと泣く 星は散るやと 涙は床の隅をた

松竹友

よしてはあはれとあはれと やねるやと ねるやと

徑苔

ひかれたりともいふと 色あも 涙も 雲り 花に ありと

心静延壽

しん静のたふれは いろを 充てても 和を ぬく 浦とて ありと

題名兼日記多井中納言入 乃尚彦平 漢作 同

溝所 赤河人 教如 先づ

玄輿日記

文保六年七月十日薩州麻見島より近清前
友大信補より御浴也思秘玄子令供養御船
海上に出るに麻見島の俗船よりなるに成りて
送るにありぬ十日に曉景大隅濱に市に御船
刈相良若島尉より録録よりありぬ十日龍伯
録より御船の令成りすむるなり

兼題松蔭新涼 杖

まゝの松蔭にありぬ松蔭にありぬ秋のやうに思へり

龍伯

暑見秋も忘れて御船より松の下にありぬ秋風を待つ

近衛友
長治

百方もかりぬえと松蔭よかきく木の袖の清く

枝をたねのりあき落さひて夜も涼くわさ初め

當夜早秋月 秋

そく極もきくかや林くは月にあつた初ま

高斎 龍伯

しり神とひしひもあふお高末のあはむくうさ

夕麻 秋

持人のわりやもかりとあけらひあきあつた初ま

隣橋衣 幸侃

空洲て近き陸のきぬくさくさくあつた初ま

河旁 秋

秋風よまぬひくあけりあきあつた初ま

難菊 珠長

ゆきえぬ難のうらぬ菊のさきあつた初ま

岩紅葉 玄子

うら人の心はりてあけりあきあつた初ま

寄鏡津紙 龍伯

津波のうらあきあつた初ま

けりあきあつた初ま

よかりてあきあつた初ま

秋月入道宗圓拜堂して社九番真行あり十四日
早てにあり入り山船よりうつりかきしまふ幸侃
御座御座不しあり十有日しめりる色山返る十六
日に唐月と流川ありぬ就御座月と送り給ひぬ
十有日幸侃有ありし山返り山返り利打帯草
花唐敷しゆきハ

小男麻の者しかりん秋葉花唐敷しめしきり有し
御家門様は推ん

就伯

花く成り行し望のゆりや多行りそそかきしゆきん

幸侃

秋葉花唐敷しめしきり有し

玄子

玄子のうめ花ハ秋の節の病しゆきん盛成式
此介にも河まきしゆきんもあしゆきん女日
幸侃不しして夜お徳あり打門くし二十一日
秋月入道真行あり女有志ある御座御座取く大急
ちとくし寺山縁局にあり役との御座系相創和
漢ありしありあり御座御座御座御座御座御座
近州縁局しゆきんしゆきんしゆきんしゆきんしゆきん
おれハ

波乃し息も月入江の秋は海 玄子

芦火招釣船

杖

又舟出船と流ゆりて

追風も多船の月此船もふ

玄衣

あふしし心遠るの間ね長衣奮耐福倚久あふ人
心縁の網ゆりぬ室ちり宵あふしと出船く志
戸のうららけ流くし浦よ秋きて心船歌あふ
ら秋月入道流きさゆり七日らの流と清出ゆれ
唐ふりけてるゆりぬ和由れ京清おくるきき久
この雲井ふふ沖津あふ流り歌ゆりありせ
ゆりぬと日暮くたよの浦へ沖志船をり彼浦よ
十日余り心船流くあふりけつとゆりぬあふりけ

はういそ

海色月

杖

和由の糸むあふ流りゆりぬ月れあひのまやあふり

初舎意

回

はきをかたはらつくとれそも今あうけつゆりあふのね京

霧中衣

回

峯とら禁の病よゆき衣燈病あふゆや蘇り志すり

回一題とらつとれて

玄衣

沖津風吹けつをこや秋の月をるあふりあふりあふり

回

あさかしのけしきをたれとてしるすにやまのけしきあり

曰

池の底よやれる月の光りそやつりそたる藤花より
又藤花首和歌

初秋風

まよ

秋のあつたけしきとてしるすにやまのけしきあり

松下萩

庭に生ある松のねきやあつたけしきあり

海鳥暁月

あつたけしきとてしるすにやまのけしきあり

寄露悲

秋油とてしるすにやまのけしきあり

社頭祝者

あつたけしきとてしるすにやまのけしきあり
はかに近海極二十首の山歌を泉源と古首ありか
くて海風静まりしつる内浦より浦より海成
道すしつるおとつる山のもねおしや中
とつたけしきとてしるすにやまのけしきあり

子早振津代々今もあつたけしきあり
撫子武神河萩のけしきありやあつたけしきあり
のけしきありけしきありけしきあり又玉依姫も河
のけしきありけしきありけしきあり日向作あり

沖□調ふくさるる十方に陸路をかりしりたり
夕よ法事あり此事をさきさきけの城を川崎是と
馳走也近友友指子八十七夜の月を松沢にけり
ぬより船にいし心初とくゆりて十日細嶋へ七時
よ若ゆりぬ女日に色づ振細嶋へ浦老と敷く細嶋
は海ありこの高橋九郎と我士紙付立て山藤乃
調ゆりぬ女方の細嶋紙吹てよ山若船を豊後
園乃内より浦へ浦浦へ浦老松海士の住るありは
布に敷くさるるもさるる松産ありありに古
くもさるるも山若に成へるまやんとありひ入
るるまは住人けりありありありありありありあり

ゆりぬ

ゆりぬのありけり敷くまのまはまらまらまら
俄々さるるさるるさるるさるるさるるさるる
夫より女方の細嶋を一回園より浦へ浦へ浦へ
おまきおまき浦へ浦へ浦へ浦へ浦へ浦へ浦へ
萩のしん相おまらりー漢楸 杖
あつ砂地と紙と杖のゆりぬ 玄糸
むす約注山沙法は制く指子又茶臼つふまらりぬ
夕さるるにりの敷つびと谷沙とすし
京都をて細色隠居三井守人けりて此茶臼は
百約指ゆり中つつけとせりておまき茶臼は

よく深めゆりぬ

河一もあれ名も紀元の月影とを宵の浦より成
りゆゆりぬを街橋の深淵おん舟よりゆりぬより
和向の山橋非時浦つるひあゝあゝあゝ大改近
くおれ八社子よりおろるふ影にさうりく成て
十八日大改の若社より比原の折節浪ぬく風
らりくさ海とつるおろりゆりつらりと松津のま
つらひあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
市北くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
昔周云且若さゆりへまゆるもわくくくくくくく
ゆりぬを同様より福永ちる舟を谷川大曲つあ

使沖途くくくく希れ都くくくくくくくくくくく
方お号く我を息若せんく所やを舟橋松子沖境
あろくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆりぬ武庫橋よりも伊比知を去来くくくくく
は取くあろくくくくゆりぬゆりぬ函島元より沖文
下巻く九月六日一巻のあねとくくくくくくくく
淡河をゆりゆりゆりぬはくくくくくくくくくく
ありそそ夕月敷くくくく入て村戸のゆりゆりゆり
程あられなりあられを去月七日八幡山山崎をく
んゆりて御免の入はくくくゆりぬ八日武庫橋へ糸

上武庫後掛子病字州外と評定ら新米をこり
作りぬ宜湯山高元寺向分候えんはくさう也
并言新也十日竹橋千代集の射山高元寺
ありて薩摩へくさう候えんを豊方院良薬
試用作りて病字く成作りぬ候えんより九月廿
二日東京の作り作りぬ同廿六日寺向をく函あむ
此奥の

凡本らる者之秋の山は成
二信法下言有
まわさ成をくさう候えんを
菊如
又候これ奥の東の寺ありて
玄子
大寺昌比の作り作りて近衛極の集とす也

十月一日吉田より函舟元以信り名所くさう
おくさう吉田より新思を過り東の寺を
森麻の谷掛を見作りて南深守の作りぬ
南深守と新思をこれありて法性寺有如此り
くけありて作りぬ傷正遍照の古跡花次山
もて紙園のはら坂の作りぬ
せん双林寺さかんやト河原六条寺山
さう家系念又吉田山の作りぬ
の四法あり山は紅葉候え作りて
あめけてくさうありて紅葉候え作りぬ
作りぬあり東福を通り橋と渡りいかりの

社友の森深坤と分るるて俄く名有りぬ神を月
下る醍醐寺に隣る田より不ま高はありて
ゆゑありぬナラバ紅巴函高止井よりけりぬ多
いに寺迄にま高は後り送り也坐高山日也山科音
相里印く有りお坂を越大津に上し志賀れ山に
らけ高孫のちくまわい山もかこりありまか
私の中たひひさくひあさる地也大津町ま高は
よの役人ふふられ途中にこの山振舞するに
かたに事うとせり之井寺坊舎高くを削きこ
て紅巴の柄古守は傍也終り逆平流日くれゆれ
えりゆりぬと井寺のうひりぬとて淋し

事す也神を月十九日ち高敷の宮派をゆりて
赤流の宮をふりて赤流の宮にたれとて
こりゆりぬ又奈むに
ある日やあひ初音約を
書よらるすまや秋と高き事
入り田にまりて

ゆりたよの差流ありは凡日月まてあがらるん
十月廿二日上京兼如高にそ興り
とふ高れくこりゆりたり夕時句 玄音法中
庵よ紅葉のちりれらるけ 菟如
女官道術極へ程候女官然及へるゆりぬと折節

建仁寺に雅長元へ系相又十月十七日細巴より金急
の連歌玉良之役軍に松がれ此布送給や新月
より慶長元年に改新月二日函高を指あや
西化法地に守り八つ時百勺成給やあやむ此各卷
より細巴を人より慶長の一と新し同守函高
以高を中守毛利及系合付く飛鳥井友
卯より尾や毛利及以香以し以主使系以
狭少将及以系給を侍給物送函高以講人也
穂守人教わら友あ下官内が浦及山名得る山中
山城及漢の大次女友より慶長以人相也同日
新し成て細巴より中村弁松あく一程廻る能

十の吉田へのわり作りて明十六日兼亭あ有大庄
友函高以高あやその山系湯之墨路いささうの
事かゝる也以相多人指さるに浦へあり侍安
あより去院をそ終日礼拝観世ちま外系中
此各人ともあより函高以高目の以子茶智丸を
教あそりいささう近衛あへ伺候十八日吉田へり
より作りぬま日函高以高其の合以具り系中此
基打はるくはあく不問坊中も也せんやもらあ也廿日
吉田より連寄以具り也

水よりわて新ああせく河色式
芦の枯あふ師一る洋
昌比
三有洋

去風より田舎の柳をよそへて 玄子

日御大納言殿御心出立也其様紙法禁中奉
御之旨と云はれ奉勅言敷資に作りし指子共之
一とありぬ冥加のりー 弟御とて人々は御女一
小燈社へ奉詣り給はる

春にらん山ありて冬の御心付に給禮ゆ事
一折久る居て候暖源山の候に給おとせりて
日此のりもこのりかとのの景の由記

あより日御殿殿御心出立也其様紙法禁中奉
御之旨と云はれ奉勅言敷資に作りし指子共之
一とありぬ冥加のりー 弟御とて人々は御女一
小燈社へ奉詣り給はる

ちりちり〜は雷とて花の散るを 玄有法印

あはの介山のさし〜物風 幸茶

女官近衛権左衛門尉及中納言 ね奉仕
女六日南禅寺へ〜茶智丸社九番は花

廿七日御心出立也其様紙法禁中奉
御之旨と云はれ奉勅言敷資に作りし指子共之
一とありぬ冥加のりー 弟御とて人々は御女一
小燈社へ奉詣り給はる

江敷の御心出立也其様紙法禁中奉
御之旨と云はれ奉勅言敷資に作りし指子共之
一とありぬ冥加のりー 弟御とて人々は御女一
小燈社へ奉詣り給はる

龍舟丹河へ下向舟子ハ山を登りてゆりぬ是も去馬
法本多と歌也十日にを果探りて山書たりて細巴
より一礼を果し盛方流より寒中丸薬入りて治法
七日薩摩より女島へ来りて又舟子の舟りて去日
細巴元ハ物わ初をて巴より又法本十帳有りて
女首を果探りて向作観修り及舟りて舟修り留り各
人舟中より舟家元ハ山系舎より及女也也
舟中より春やと枝の梅花枝あり
舟り初日れうけ定記庭より舟子行
廿六日龍山探光照流及入江及大炊山門及富田及
昌比舟りて歌文より山酒宴也女七日舟りて探龍
舟りぬ

山探りて山系舎也女八日に山家門探りて舟子
舟りて舟りて舟りぬ
慶長二年舟りて山系舎也舟りて舟りぬ
舟りぬ

試筆

玄子

舟行りて舟りて舟りぬ舟りぬ舟りぬ舟りぬ

茶白

舟りたりて今朝去りて去日也 玄子

舟りたりて今朝去りて去日也

舟りたりて今朝去りて去日也
舟りたりて今朝去りて去日也
舟りたりて今朝去りて去日也
舟りたりて今朝去りて去日也

又酒中のねり

若くは酒中もあつぬまの光る

紙巴

又酔中のねり

皆人いせふあふ坂のまゝいしとゆふ光のくはるは也
又紙巴七十之歳の年れこれの海も

あつて浮山経も七十れこれの暮れ何しきりか那

書付終るす時事印と終りし同日紙巴より全状
なり

試筆

二位法中玄旨

物言ふれ少れ山場もまゝいしとて職てむじをい

丹列をせのうらりかき

去つていふやうな浦の波 同

十二首近衛孫より御書なりし 幸をれ廣摩表

町田入道存松より結彩をきや 十六日を常孫

より紙巴御書別出京しや 同日紙巴より全状

此連哥ふも来也 十九日上京しきりうらりにて一行

を兼如伺心也 廿日初候と成へ 幸くさけきや

紙巴内言て冷や 廿一日近衛孫と一糸及御目し

かりや 廿二日を常孫と為田及伺信也 廿三日全衛

孫とてま奇四具り 昌化と外廣橋及勸修寺

及物洞院及外し 松ももいま 礼也 廿四日紙巴より

て一行具り 廿五日水登へ 糸湯也 法樂も 十首

乃哥ぶらも也 近浦振もはたけううまふんか
家門息災安堵此字也

秋物 玄よ

風あそくやあられり 春風の羨妙よ 色小柄の白は

花近簾

百舌は声あちちううふのよをた盛のめあひせう

見む

村くは家も消て 若のやれ浦のるるや 花あは浦

池鳥友

袖くしてわやあそん 玉敷のうはたの池よ 白ふ教派

浦帰雁

昔流る浦木の波りくうや 雲井の石のふあそん

野猿乃

うぬた猿の衣れ 病々きん小茶わら ぬ燈流の紀

夕籠

いはあれたまひうらけう 山やれ 雲う指のいひひあ

秋風句

のやうぬるれ ね人うらめん 舟あそん しては浦風

海邊鶴

いふまは 秋もれ 月影浦風 雲うまうて なたらの 鶴ん

祝言

うたのぬあそんの 花は春日山 峯の物れ 雲うはりれ

春日

おろろも誰うありらん春日山ありのよの津の海とて

早春

板

おれ秋も春もや煙をん春くはつて春はくも法人

水鳥如也

るりもくちりよりはくも鶯鶯のあふれぬ池のありま

伊勢

守れ秋清き海れやまゝやいすれ川の末はぬを以

朝萩病

蟹門板

一わらいらぬれやすん萩病のよけよまの庭の約つる

池柳陰

板け楮とひふと池あり底のみよりやねまゝうらむ

石清水

長宗あり春よりうらつと石清水花とかがりぬおね入

離騷愛

余の

一葉沈及

うれきふ離の病乃まぬれ麻布つとにむのちわか

河時雨

声うれ河湫の流やあこれ山風さそふ河曲をさそ

氷色月

よせゆり波ののけい遠をんてそとに秋の夜月

庭霜

玄子

日のぼるも影りあつても吳竹乃葉をれねやうつじすらん

夕納涼

庭の向ふありて森立ちたる夕風よそにわらぬるのすまじ
二月十日伊豫(系宮)富田信法も及る山奥も也
お取と紙大津葉津波ささくふら山鏡山おととく
あはくとりあふふ煮ゆりぬ十町の鈴鹿山と紙くあは
はふ煮ぬ富田も及る向く山鏡も也十町の伊
智の山回くまゆり煮ぬ津波も及るあはけゆりぬ
外宮内宮へまゆりかきけあふふあふふあふふあ
けれらるるあふひあはけぬ外宮のあはけらるる川
宮河も也外宮のあはけらるる天の雲もあふふあふふ月
よそ森も内宮へ一里隔りて旧宮のあはけの橋

宇治より一里して津波山より流るるあみとさるる川その
末はす川と森もあはけ也是旧宮也うら山内宮より
南や津波山の東やあはけらるる山内宮より東也
ゆららの浦も内宮よりあはけらるる浦そのつらや
跡をたてて紙大津葉津波ささくふら山鏡山おととく
津よりあはけの紙大津葉津波ささくふら山鏡山おととく
あはけけして杉山ゆりぬ

十町の河の津へゆりぬ又まわらぬ津波も及る
て紙大津葉津波ささくふら山鏡山おととくあは
のあはけ内宮よりあはけらるる津波も及るあはけ
はあはけまわらぬ津波も及るあはけらるる津波も及る

何人入ゆりぬい十津川はすく山の麓也あきなり浦は
あけはけりいああせ也わさ山はあけ

室御のそのあは風は清てくろぬ若のわさ山武
出高むられ乃弁津津津をたあひし保巴有和
と別はゆり耐帯麻をくゆりて又くろく送出されて
わさ清れねあきれ山のつさかきゆり入りのあきお
くろく井とくひ念のふれ写は志賀の山也あきこれ
走井ハ大津のさき也大津と打出のほくゆりこきろ
お坂のあきもや女百近出探とあき女官に祿高
江雪糸昂具のほあき又ハ糸白もて一折
さくぬるやあきとくひ来一花の友 杖

秋もゆりぬ月うらみ夜を

祿高

雪水のうらみとさうす音流く

江雪

田圃のうらみれぬいされなり

玄与

同日のうらみさくは秋もゆり

春のうらみ糸今うわけて庭の匂いされあひあき花の香は
咲かんとぬらむの登ととねのうらみさくは秋もゆり

近出探のうらみあき

咲いらる花はあきさくは秋もゆり松のうらみさくは秋もゆり
女百吉田のうらみ山高むは具の

くろくゆりぬいさくは秋もゆり

昌比

梅うらり人のわら山風

玄有法中

うらひのる地へつる勢りて

如方

日燈友我と并友介く山出はや廿日付るく下利
ゆりぬ近お孫鈔刻くいふいふり

厚るのいし沖はる波まうり又もいそいそ花の盛と
いふいふりゆりぬ

うは豚とあれやせまういそこの花の白ひと猫いふて
一月一日付るにより船よりち坂へ若ゆりぬ二日
ち坂より龍伯柳へ何作刻りあうりしうすいふり
の泣くはく物ゆりぬ

お首は法樂

海邊庭

春風いれさまりはるもあてらる浪のあつたれ船あは

去月

片友の花とさしはりくと龍月よの影とさうりく

苗代

村くはにそる指い善柳のあうり物あうり小田乃苗代

松原友

咲ゆれさうりてあうり海へけて松のあうり波とまをる

社頭志

香も振神の井さうに咲むや表れ多向れもなをらん
経書のゆあひのるほそいあうりれ松原はる遠里小
登りてえゆりぬ又信りてむけあて

抑もこれ忘れずん候程の法とあらつて是れを
わして御上を宗とて十月月よりして御納へる候
おより此月御納へたるに若しや

文政十一年庚寅冬十月晦日於益城郡砥用郷宗之

中村直道

孝書新編卷第百廿五

